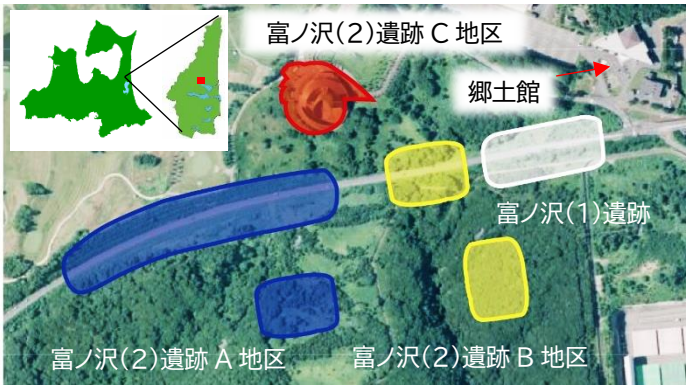
六ヶ所村立郷土館　　企画展

今よみがえる富ノ沢遺跡

～日本最大級の縄文集落の盛衰の謎に迫る～



縄文時代中期は温暖な気候で、ブナ・ナラ・クルミなどの落葉広葉樹が広がる。後半には海退現象も始まり、干潟は湿地帯に変わり、海水産のハマグリ・アサリから汽水産のヤマトシジミに変わる。

老部川と尾駮沼に挟まれた標高約 65m の段丘の最奥に位置する。国道 338 号線バイパス建設に伴い富ノ沢（2）遺跡 A 地区 B 地区が、原燃 PR センター建設に伴い C 地区が発掘された。富ノ沢(2)遺跡の東側が富ノ沢(1)遺跡で、西側に富ノ沢(3)遺跡がある。

◆富ノ沢遺跡で見つかった遺構数

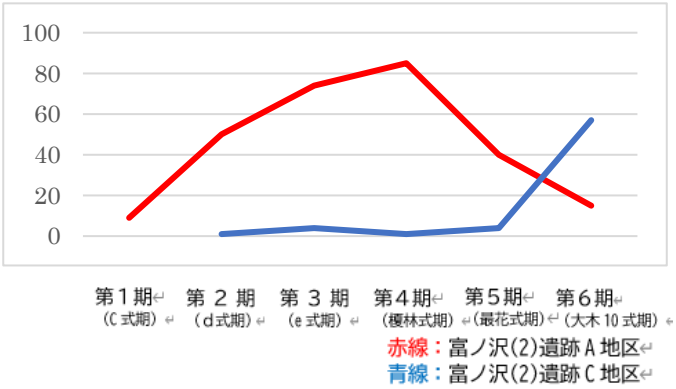
地区		調査年	竪穴住居跡	土坑	貯蔵穴
(1)遺跡		1987年		18	1
		1988年	2	7	
(2)遺跡	A	1987年	5	27	10
	A	1990年	405	698	174
	B	1987年	2	40	1
		1988年	7	60	6
	C	1990年	79	179	69
(3)遺跡		1989年	3	5	1
合計			503	1,034	262

集落の始まりの前半は、５軒から８軒でムラをつくり、円筒土器文化が続いていく。土器の把手や口縁部あたりに人の顔や足、イノシシ・クマ・ヘビ・フクロウなどの形が見られ、何らかの呪術と関連があると考えられている。後半から東北南部から大木式の影響を受けた土器にかわり、地床炉から複式炉（火の信仰が考えられる）に発展する。後半はより人に近い十字形の土偶になり、石棒が発達する。住居内に石を立てた特殊施設の祭壇（９４基）のようなものも出土する。土壙群や住居跡群が配置され、計画的なムラづくりがなされていった。北海道や北陸・関東方面から物資が搬入され、ヒスイやコハク、黒曜石やアスファルトが流通する。集落が大規模化する。

富ノ沢(2)遺跡 A 地区からは、約 410 軒以上の竪穴住居跡や土坑約 1,000 基、約 18,600 点以上の石器類が出土し、約 500 年以上続いた大規模な円筒土器文化圏の集落だったことがわかった。A 地区にあった集落では、第 1 期円筒上層 C 式期から第 4 期榎林式期にかけて人口が増加した後、急激に減少に転じた。逆に、C 地区は東北地方南部の大木系土器文化の集落で、第 6 期(大木 10 式期)に入ると急激に人口が増加している。もともと A 地区の集団が C 地区に移り住んだのか、それとも、東北南部の方から異なる集団が移住してきたのかという、複数の考えがある。

その他、周辺では、第 6 期(大木 10 式期)に入ると弥栄平遺跡など、今まで人が住んでいなかった場所に、新たな集落が生まれる現象が起きている。

◆富ノ沢（２）遺跡 A 地区と C 地区における住居址数の変遷



◆ 富ノ沢遺跡における土器・矢じり・住居跡の変化

◆ 特殊施設（祭壇と石棒）が出現

円筒土器文化の集落 A 地区から、特殊施設（祭壇）を持つ竪穴式住居跡 94 軒（円筒上層 c 式期から最花式期）検出。子孫繁栄を祈っていたと考えられている。

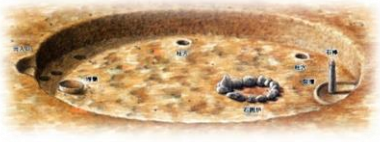


図1:住居内特殊施設復元図

写真1:154点出土した石棒

※引用文献・図１・写真１：青森県教委 1994『青い森の縄文人とその社会　縄文時代中期・後期編

六ヶ所村立郷土館　　企画展

今よみがえる富ノ沢遺跡

～日本最大級の縄文集落の盛衰の謎に迫る～

自然豊かに恵まれた六ヶ所村には、先史時代からの遺跡があり、昭和５０年代には「むつ小川原開発」により多くの遺跡が発掘された。今回は、六ヶ所村にもあった日本最大級の富ノ沢遺跡を紹介する。この遺跡は円筒土器文化圏に属し、青森市三内丸山遺跡に次ぐ縄文時代の大集落跡である。円筒土器の変遷を紹介する展示と、富ノ沢集落の盛衰や新たに出現する集落の謎にせまる企画展として開催する。

◆ギャラリートーク７月 15 日(土)10 時から 11 時

講師　三内丸山遺跡センター　副所長　小笠原　雅行　氏

■遺跡巡りツアー　８月 26 日(土)9:30~12:30

講師　東海大学　教授　松本　建速　氏

【円筒土器と集落の変遷の歴史】

1　円筒下層式土器　泊(1)遺跡　前期
「円筒土器文化圏の始まりの土器

円筒下層式土器は、縄文 1 万年の中で一番多彩な縄目の文様をもつ。縄目の並びが地域によって異なり、”津軽と南部”の様な地域性が見られる。

円筒下層式土器

2　円筒上層 a 式土器　上尾駮(1)遺跡　中期初頭
「中期の始まりの土器」

円筒上層 a2 式土器は、口縁部に太い粘土紐が付くのが特徴で、その中には 4 通りの縄の押圧が付き、縁が大ぶりに波立っている。全体的に筒形で、胴部に斜縄文がつくことでシンプルに見える。

円筒上層 a 式土器

3　円筒上層 b 式土器　富ノ沢(1)遺跡　中期前半
「まだ集落が形成されていない頃の土器」

富ノ沢遺跡で見つかる一番古い円筒土器。口縁部の粘土紐の文様がより複雑化し、すき間の C 字の縄の押圧文が特徴的である。集落が始まる頃、円筒上層 b 式土器を作る人と円筒上層 c 式土器を作る人が共存していたのかもしれない。

円筒上層 b 式土器

4　円筒上層 c 式土器　富ノ沢(2)遺跡　中期中頃
「集落が形成され始めた頃の土器」

円筒上層 c 式土器には、伝統的な縄の押圧文が見られない。集落が始まる頃のもので、住居跡が 9 棟だった。故郷を離れ、新たなデザインの土器をもつ若い集団がやってきて、モノや人が集まる新たな集落が始まったと考えられる。

円筒上層 c 式土器

5　円筒上層 d 式土器　富ノ沢(2)遺跡　中期中頃
「集落が拡大し、計画的に集落づくりが行われる」

円筒上層 d 式土器になると、文様の装飾が粘土紐のみになる。この頃の住居跡から東北南部に多い大木式土器が見つかり、その影響を受けた円筒土器が出現する。

円筒上層 d 式土器

6　円筒上層 e 式土器　富ノ沢(2)遺跡　中期中頃
「大木式文化を取り入れた富ノ沢集落」

円筒上層 e 式土器の特徴は、串などで描かれる沈線文で、東北南部の大木 8a 式土器から影響を受けた文様だ。大木式土器文化に特徴的な石囲炉や無茎石鏃が見られ、集落の生活や狩猟にまで、大木式土器文化の影響が及んでいる様子を見ることができる。

円筒上層 e 式土器

7　榎林式土器　富ノ沢(2)遺跡　中期後半
「大木系土器に変化し、大規模な集落となる」

榎林式土器になると土器全体に渦巻文がつき大木 8b 式に極めて近い土器である。この頃、竪穴住居跡数が最大となり、住居跡や墓域の位置関係が今までの集落とも変わり、土器や石器など道具だけでなく、ムラの様子までも変化した。

榎林式土器

8　最花式土器　富ノ沢(2)遺跡　中期後半
「急激に集落が分散化し、小規模化する」

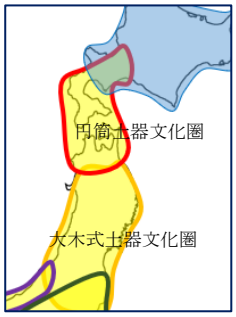
最花式土器になると、細長いｎ字の文様がつき、大木 9 式土器につく逆 U 字文に類似している。この頃から集落の企画性が崩れ、住居跡が分散し衰退していく。

最花式土器

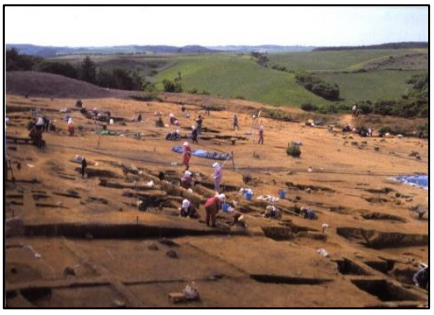
9　大木 10 併行式土器 富ノ沢(2)遺跡 中期末葉
「東北南部大木式文化圏の影響を受けた土器」

この土器の上部は粘土紐と円形の刺突文と突起がつき、胴部は膨らみ細い縄目がくつ。円筒土器文化の集落が衰退したのち、東北南部の大木式土器の影響を強く受けたこの土器は、少し離れた小高い丘の上の新たな集落から出土した。

大木 10 式併行土器



中期後半の文化圏



富ノ沢(2)遺跡 C 地区発掘現場